

受験開業手続及心得を述べている。本書は改訂3版(334頁)が38年に出ている。

6) 水野寛爾編『新纂歯科試験答案集』

解剖70, 生理51, 薬物90, 病理59, 治術64, 器械72題の各問に296頁を用い, 付録の参考事項を入れて322頁で終る。明治37.7.30日本歯科商社刊。これも増補再版明治39年および3版を40年に出している。

7) 佐久間恭造編『歯科答案集』

明治41.2.13豊文堂発行。解剖72, 生理53, 薬物99, 病理64, 治術59, 器械84問の解答と, 付録も前二者と同様である。

8) 水野寛爾著『臨床歯科医典』

袖珍版臨床ハンドブックで, 診断, 治療, 手術, 技工, 矯正, 薬剤, 法令の7編に分けて556頁にまとめて, 受験生と臨床家の双方に便利に編集されている。明治44.11.25歯科学報社刊。

2. 大正時代受験書

大正に入ると正規の講義録や教科書と並んで, 豆本と呼ばれる受験参考書が氾濫するようになる。大正5年「歯口世界」の広告には以下の各書の記載がある。

1) 袖珍臨床歯科学全書

日本歯科医学専門学校長中原市五郎先生監修, 同教授永沢盛編纂, 大正5年刊。全科目にわたり要点を的確にまとめ, 付録として法規, 試験規則, 劇毒薬, 英独羅を併記した用語表を含んでいる。

2) 寺木定芳・高橋謙齋編『歯科表解叢書』

第1編歯科生理学表解, 第2編薬物学が大正5年7月までに出版された。3編以下7編まで, 病理, 治術, 技工, 解剖, 口腔外科が刊行予定とある。簡単明瞭に歯科受験術を教えることをうたっている。以上1, 2)は日本歯科医専出版部刊。

3) 北村宗一著『歯科答案集(増訂6版)』同『歯科試験及第秘訣・歯海乃示針』同『改版歯科技工学』大正5年7月文光堂刊。近刊予告には『歯科試験問題集(7版)』北村著『袖珍歯科手術学』, 『最近歯科治療学』, 『最新歯科薬物学』がある。

これらいわゆる豆本は大いに受験生にもてはやされた。その他にも類書は多くあった。

4) 川上為次郎著『歯科診療医典』

これは明治45の水野の医典と同様の形式で, 外国式を加味したものである。大正15.8.25金原書店刊。

時代が進み, 専門学校を卒業がイコール開業免許となる人々が大勢を占めるようになって, これら受験書は昭和初期には次第に消えて行く運命を辿った。国家試験が復活したのは第二次大戦後のことである。

4) 日本最初の歯科大学創設構想とその学生運動

The First Plan of the University Dental Education and Its Student Movement

森山 徳長
○田辺 明
石川 達也
長谷川正康

Norinaga Moriyama, Akira Tanabe, Tatsuya Ishikawa and Masayasu Hasegawa

1. はじめに

明治新政府の医療政策の重点は, 漢方を廃し西洋とくにドイツ医学を取り入れることに在った。そこで学制を公布し, 帝国大学を頂点とする官立医学校が全国的に組織化された。

一方歯科領域は, 政府からは全くかえりみられず, 明治20年代に入ってようやく私立の小規模な歯科医学校が2, 3開校したに過ぎなかった。東京府の各種学校認可を2番目に得て明治23年1月発足した高山歯科医学院で, 米国で免許を受けた高山紀斎の樹てたカリキュラムは, 当時米国の歯科大学でさえ2年が普通であったものを, 外国語教育を主とした予科1年を含む4年制とした。目標とするところは完全な歯科大学を目指したものであった。ところが学生がたった9名しか応募せず, 遂に妥協的な複合学級の2年制として, 同年夏になりやっと85名の入学生を得た。この時代の歯科医学校では, 卒業証書は歯科医師の資格獲得を意味するものではなかった。そのため医術開業

歯科試験に合格すれば生徒は退学してしまい、学校教育は経済的には立ち行かず、いくつもの学校が消えていった。

明治32年血脇守之助は同志と相計って官立歯科医学校設立請願書を文部省に提出した。大学程度の歯科医学教育を官費で行うべきことを求めたものであった。しかし当局の反応は冷たく、その実現は望むべくもなかった。官立の東京高等歯科医学校が開校したのは、30年後の昭和3年であった。

経済的困難を打破する能力を評価された血脇は、高山から継承して新たに東京歯科医学院を興した。その手腕は7年半にして専門学校昇格を果たし、その後も拡張を続けた。血脇はさらに大きく前進するために、大正9年を期し学校を財団法人化することを決め、内外に主旨を宣伝して募金を開始した。

2. 学生会の運動準備

血脇の命でペンシルバニア大学歯科部に留学した奥村鶴吉は、帰朝後専門学校設立の3年制カリキュラム編成を担当し、同時に学生会をスタートさせた。米国総合大学歯科部の組織に接した経験から学んだ措置であった。

財団設立のため拡張基金の募金と呼応するように、東京歯科医学専門学校学生会は、会長の奥村幹事と協議して、学生会独自の「歯科大学創設期成大講演会」を開くことを、全校生徒総会で決議した。

先ず大正8年12月4日生徒総代会でプランが準備され、5日に第1回校内学生大会を開き、大学創設期成決議文を可決、実行委員を選出した。それに従って毎日のように委員会を開いて計画は進められ、12日には第2回学生大会で決議し、さらに細部にわたる検討が加えられ、着々と準備を進めた。

学生会の委員は、正副実行委員長に縣 清、高橋茂次の2名、会計は柴田 実以下3名、交渉係に世良忠男以下6名、庶務は西岡 豊他4名、記録係大谷一郎以下5名の陣容であった。

顧問には、医事法制の講師・工藤鉄男（のちに鉄道大臣）および学生会理事の同窓向井喜男（ラ

イオン歯磨）を委嘱した。また会則、趣意書を起草し運動方針と演説大会当日の準備には万全を期した。交渉係は応援弁士や新聞社の後援依頼に走り廻った。

3. 演説会

12月16日の当日は師走のことであり聴衆の集り方に一抹の不安があった。しかし学生たちの熱心な準備が功を奏して、4時頃から人が集まり始め、定刻5時半には2,000人の参会者で満員となった。

『歯科大学創設問題演説会』は、副委員長の司会で「この演説会は、純粹に学生の集りで政治的色彩は全くなく、学生として真実を天下の有志に訴え、理解と援助を与えてほしい。」と開会の辞を述べて始まった。

縣委員長は経過報告の演説を行い、以下のように決議文を読み上げた。

『東京歯科医学専門学校は、大正9年度をもってその組織を変更して財団法人たらしめ、よってその基金を増額し、進んで単科大学の創設を期す。

右決議す。

大正8年12月5日

東京歯科大学創設期成会』

次いで趣意書を読みあげたが、その主旨は「歯科大学の創設は、歯科の独立と学理の蘊蓄を究めること、口腔衛生の普及により国民の衛生を完備すること、歯科医の人格・識見の向上のため不可欠である。血脇校長が自らの資産を無条件に譲渡し、財団法人として歯科医学の発展を期したいとする大英断を、我々学生は支持してこの運動を推進したい。」というものであった。

このあと、以下の応援弁士が次々と登壇した。

- 1) 理想の実現 弁護士 平松 市蔵
- 2) 歯科大学創設に対する我等の衷情 学 生 柴田 米三
- 3) デモクラシーと歯科教育 日本大学講師 工藤 鉄男
- 4) 歯科の独立問題 東京歯科医学士 向井 喜男
- 5) 世界に誇るべき日本の使命

中外新報社長 小松 緑

6) 苦闘30年

東京歯科医学士 風間又四郎

7) 欧米における歯科医学の大勢

医学博士 田代 義徳

8) 婦人の見たる歯科医界

歯科女医 細谷 英子

9) 歯科大学創設卑見

歯科女医 小島 貞子

10) 権利の要求

東京歯科医師会副会長 村岡 清治

村岡は事前には要請を受けてはいなかったが、
とくに自ら買って出て学生を激励した。

続いて司会者高橋の閉会の辞で演説会は大成功
裡に終わった。

4. その後

12月9日夜、実行委員慰労会が人形町橘花屋で
開かれた。血脇校長、奥村幹事、水野生徒監、工
藤講師、向井・風間両学士らが出席し、校長は再
三感謝とねぎらいの言葉をかけた。

一方資金面では、本計画のため校長が100円、
教職員から50円の寄付がなされている。

また当日出席不能だった金杉英五郎、今 裕、
岡田 満、前田慶次は学生会記者と会談したり、
原稿を寄せ、翌春出版された『歯科大学創設の叫
び』に採録された。

12月17日には第3回学生大会が開かれ、氣勢を
挙げた。17日夜、18日の委員会で、弁士への謝
礼、礼状その他の事後処理を行った。またその後
の委員会で、冬休帰省中の各地での募金活動の状
況が報告された。

学校当局は寄付金の額が予定に近づいたこと
と、学生があまりにもフィーバーし過ぎるきらい
があり、学業がおろそかになるのを恐れて、学生
会独自の募金運動をこれ以上拡大しないことを求
めた。大正9年3月1日の第4回学生大会では、
学校当局の意のあるところを了承して運動の一応
の終止符を打つことを決議した。

この事は、第1次大戦後の好景気と大正デモク
ラシーの自由な気風が、学生たちのスクール・ラ
イフを高潮させ、大運動を盛り上げた現象として

記憶されるべき、校史の一駒であった。

5) 昭和初期に始まった歯科材料規格
検定とその後の発展

Studies on the Standardization of Dental
Material in the early Showa Era and its
Post-War Development

○亀谷 博昭

小坂 剛也

市之川 武

大山 萬夫

森山 徳長

Hiroaki Kametani, Takeshi Kosaka, Takeshi
Ichinokawa, Kazuo Ohya and Norinaga
Moriyama

1 われわれは第18回学術大会において、昭和
8年に奥村鶴吉が内務省に提出した歯科材料に関
する報告書と、その後昭和13年および18年に日本
歯科材料協会がとりまとめた規格調査報告書の詳
細について発表した。また花沢 鼎が戦時中の歯
科用貴金属の不足に対処するために行った金代用
合金についての研究の成果を報告した。

この歯科材料規格制度は、内務省が昭和5年5
月に、国策に沿うべく日本歯科材料協会に社団法人
認可を与え、血脇日本歯科医師会長にその具体
化を依頼したことに始まっている。血脇の意を体
した日歯理事長（専務理事）奥村鶴吉は、昭和6
年4月政府側、学者・臨床家側、協会側それぞれの
規格調査委員を委嘱した。官・学・商を網羅し
た組織ができ上がったのである。

規格調査は奥村主導の下に進行し、昭和8年6
月シカゴ市100周年記念歯科医学会への出席を兼
ねノースウエスタン大学で研究し、帰国後報告書
を提出した。

2 そもそも米国では第1次世界大戦後、米国
陸軍がアマルガムの規格制度を National Bureau
of Standards に要求してすぐれた規格を作って歯
科界に歓迎をもって迎えられ、さらに他の材料に
についても報告が要望されたのが端緒となって、こ